紅頭嶼に於ける高砂族住家の研究

正員千々岩助太郎

內 容 梗 概

本論文は筆者が数年前より繼續中の高砂族住家研究の中間報告で去る昭和18年5月本大會に於て發表した「南臺灣に於ける高砂族住家の研究」の續報である。紅頭嶼は臺灣本島の東南海上に浮かぶ一孤島で住民は約1,700餘のヤミ族と呼ばれる高砂族の外は数名の警察官吏並にその家族のみである。交通の便極めて惡く臺東を起點として月2回の定期船はあるが就航船は僅か100噸足らずの發動機船であつて夏期は颱風、冬期は季節風の影響を受けて欠航する事が多く、数十日間交通杜絕する事も珍らしくない僻境である。筆者は昭和12年4月及び15年6月の2回に亙り渡航し、通算すれば40日餘同島に滞在して調査研究し、殊に15年の滞在中には恰も家屋の改造期に遭遇し、幾多の好資料を蒐集し得た事は幸甚であった。

目 次

第1章 ヤ ミ 族

第2章 ヤミ族の住家

第3章 附屬建造物

第4章 ヤミ族住家の實例

第1章 ヤミ族

1. 紅頭嶼 (第1圖)

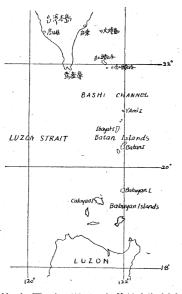
紅頭嶼は臺灣の東南海上バジ海峡に浮かぶ小島で、面積48平方粁餘、周園36粁餘に過ぎない。東經121°29′より同36′、北緯22°より同6′に跨り、臺東より東南90粁の距離にあり晴天の日には臺灣本島より明に之れを望むことが出來る。又フィリッピンのバタン諸島には極めて近接の位置にあつてその北端のヤミ島には僅かに74粁の距離に過ぎず、紅頭嶼の最高山なる紅頭山(548.2米)に登れば遠く雲煙の中に夫れ等の諸島を認める事が出來る。本島は前記の如く一見看過し易い小島であり、我

國に交渉を持つに至つたのは、明治28年領臺以來の事であるが、西歐の航海者間には早くも17世紀より知られてゐる。

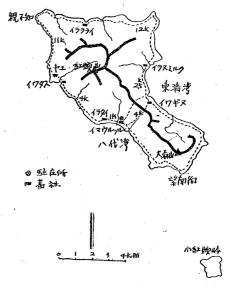
紅頭嶼の地形は急岳族立し全島殆んど山岳より成り海岸線は 比較的單調で、海岸に狭小な平地を除すに過ぎない。山岳の主 なものは前記の紅頭山と大森山 (479.7 米) で大河はなく、七つ の溪流があつて水は豐富で又清冷である。氣候は高温多濕、雨 量も多く毎月相當の降雨がある。殊に夏期に現はれる颱風はそ の激基と頻繁な事に於てルソン、バタン、バブヤン諸島と共に 他に其比を見ない程である。

2. ヤ ミ 族

紅頭嶼に居住する高砂族はヤミ族と呼ばれ、馬来族インドネジアンの血液を保存する極めて原始的な種族である。今日この高砂族の細かい系統的研究即も南方の如何なる細別的部族に類縁を有するか、又如何なる經路に依つて現在の種族をなすに至ったか等の問題は全く闡明されてゐない。然しながらヤミ族は



第 1 圖 紅頭嶼及び近接地方概念圖



第2圖紅頭嶼概念圖

^{*} 臺北州立臺北工業學校教諭

その言語にも亦土俗にもフィリッピンのバタン諸島の蕃族に極めて類似すると云はれ、又彼等の發祥に關する口碑にも太古南の諸島から移住したと語つてゐる者もある點より南方より渡來した事は推定出來る。然しその年代は相當以前の事は明で又移住當時は豪灣本島のアミ族、バイワン族等とも多少の交渉を有してゐたと見るべき事實もあるが、少くとも近代に於ては之等の交渉は全く斷たれ、紅頭嶼は名實共に隔離せられた島嶼となつてゐた。

3. 紅頭嶼に於ける蕃社の分布及び戸口 (第2圖)

紅頭嶼に於けるヤミ族は7 蕃社に分れて居住し總數は1,777名である。

蕃 沚 戶 口 (昭和14年12月末現在)

著	沚	戶 數	人口
イモウル	ツル社	38	165
イ ラ タ	1 社	79	365
イワタ	ス社	10	81
ヤュ	一 社	79	369
イ ラ ラ	ライ社	74	330
イラヌミ	ルク社	59	268
イワギ	ヌ 社	61	249
計		400	1,777

第2章 ヤミ族の住家

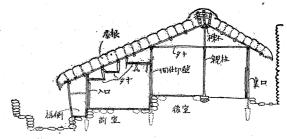
ヤミ族の住家は主家、作業室及び凉臺より成り外に産室を有するものもある。主家は地盤面を掘り下げて建てられ、敷設の石段に依つて出入する。作業室及び凉臺は主家の前面或は側面の廣場に建築される。何れも方位は一定せず海に面して建てられたものが多い。

2. 主家の構造 (第3圖---第8圖)

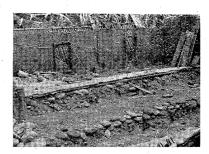
主家は寝室として用ひられ地盤面より約2米掘り下げて建築される故屋根の棟が漸く地上に露出する程度である。蓋し防暑、防風の為であらう。平面は矩形平入で前面に椽側を有し屋内は前室と後室とに分れ縦斷面に於て椽側より前室、後室へ漸次階段式に上つてゐる。前室は全部板張りで子供等の寝室として用ひ其兩端に竈及び吊棚を作り、後室はその略中央に親柱があつて親柱より前方は板張りで主人或は老人夫妻の寝室として用ひ後方は土間でその兩端に竈及び物置棚がある。入口は前室に4ヶ所、背面に1ヶ所あるのが通例で何れも約60×60 輝位の小さなもので引戸を有し、前室と後室との間仕切壁にも前面と同じく4ヶの入口があるが戸はない。

3. 作業室の構造 (第9周――第11圖)

作業室は晝間は作業室として用ひ又炎暑の候に於ては寢室と



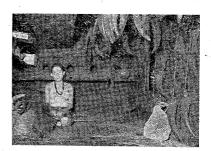
第 3 圖 主家 斷 面 圖



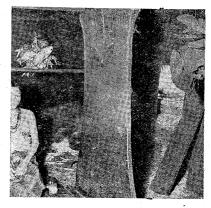
第 4 圖 主家建築地盤



第 5 圖 主家内部 (前室の竈)



第 6 圖 同 (前室の吊棚)

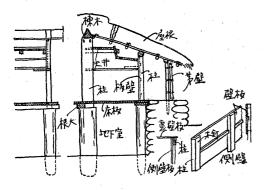


第7圖 同 (後室の親柱)

して用ふる事もある。地上に低く建築され地下室を設け地下室 は物置として用ひられる。平面は矩形、單室、板張で一般に妻 入であるが海面よりの直風を避ける為前面に簡單な防風壁を作 り其兩側に入口を附けたものもある。地上に露出する部分の壁 は二重壁で又作業室のみに板天井を張る。蓋し防暑の爲であら 50



第8圖 主家内部 (前室より後室への入口)



第 9 圖 作業室斷面圖



第10圖作業室柱建



第11 圖 作業室の二重壁

4. 凉臺の構造

凉臺は廣場の通風のよい位置に作られ晝間は凉み場として用 ひ又炎暑の候には食事等もなされてゐる。平面は正方形、又は 矩形で4本又は6本の柱を建て1地上1米乃至2米位の高さに 床を張りこれに簡單に屋根を架けたものである。

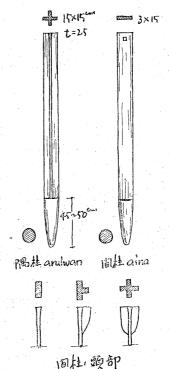
5. 産室の構造

産室は新婦の初産の時建築し出産後は若夫婦の假寓として使 用される事が多い。地盤を約50種乃至1米位掘り下げて建築 し平面は矩形の小規模のもので入口は1ヶ所平入である。屋内 は單室板張で一端に竈を設ける。

6. 各部の構造

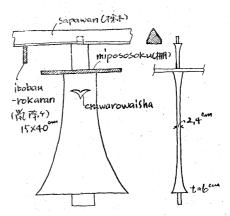
柱 柱は總で掘立柱で丸太を圖の如き斷面に工作し、主家の 親柱のみは三味線の撥の形をした厚板である。

(第12圖——第15圖)

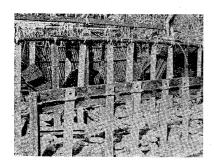




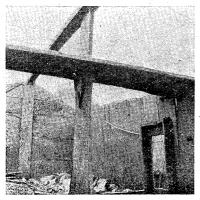
第 12 圖 柱 梼



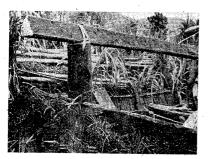
第 13 圖 親柱及び棟木構造圖



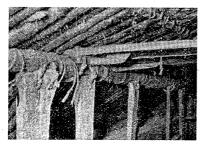
第14圖 主家柱建



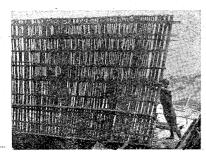
第15 圖 主家の親柱及び棟木



第16圖 主家の棟木



第 17 圖 主家間仕切壁上部(母屋の取付)



第18圖 主家の屋根下地

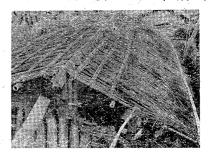
棟木 棟木の鰤面は三角形でこれを兩妻柱及び親柱に載せて 結束する。(第15・16 圖)

軒桁及び母屋 軒桁は竹、母屋は丸太を用ひ、母屋は間仕切壁の上のみに架ける。(第17圖)

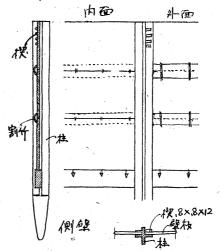
屋根下地 屋根下地は棟木から前部と後部とに二分して、丸 竹、割竹及び鬼茅の莖を以て豫め組立てたものを棟木、母屋及 び軒桁に結束する。(第18圖)

屋根 主家、作業室、凉臺、産室等何れも切妻茅葺屋根である。(第19圖)

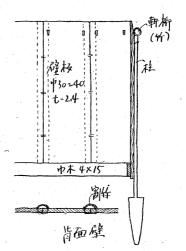
壁 壁は總て板壁で厚板を横に並べ柱に木釘打とするが主家



第19圖 主家の屋根葺



第20圖 主家側壁構造圖



第 21 圖 主家背面壁構造圖



第22圖 主家背面壁

の背面壁のみは厚板を縦に並べて下部は地中に埋める。又防暑・防水の為板壁の外部に茅を東ねたものを吊したもの或は石積壁を繞らしたものが多い。作業室の側面及び背面は板壁の外側に約60糎の間隔をおいて茅又は石積を以て外壁を繞らし所謂二重壁である。(第20 圖——第22 圖)

床 土の上に玉石を轉がして板を張り繼目には木の目釘を用 ひてゐる。(第23 圖)

天井 作業室のみに折上式板天井を張つてゐるが之も亦防暑 の爲であらう。(第9圖)

7. スケール

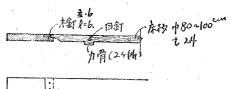
ヤミ族は他の高砂族と同様に一定のスケールを有しないが、 兩手を擴げた長さ卽ち1尋を單位として用ひてゐる。これを asarupa と云ひその ½ 卽ち半尋を asarima と云つてゐる。 更に肘を曲げて手を輕く握り肘關節から中指の第2關節までの 長さを siko, 指を伸して小指から人差指まで4本の指の幅す apatakamai, 紅付指から人差指まで3本の指の幅を atorakamai, 中指と人差指と2本の指の幅を nuakamai, 人差指1本 の幅を asakamai と呼んでゐる。

ヤミ族の壯年男子 10名に付實測した結果は次の通りで siko は一尋の約 ¼, apatakamai は siko の約 ½ に該當する。

1 asarupa = 4 siko = 20 apatakamai.

	asarupa	asarima	siko	apatakamai
Α.	159.0	75.9	38.0	8.0
В	162.0	81.0	40.0	8.0
\mathbf{C}	156.0	78.0	[37.5	7.8
D	156.0	78.0	39.0	7.6
\mathbf{E}	158.0	79.0	40.0	8.2
\mathbf{F}	163.0	81.5	40.5	8.0
\mathbf{G}	166.0	83.0	41.0	8.0
\mathbf{H}	163.0	81.5	40.0	8.1
1	160.0	80.0	40.0	8.0
J .	165.0	82.5	41.0	8.3
計	1608.0	804.0	398.0	80.0
平 均	160.8	80.4	39.8	8.0

但し彼等は長年海上に出て舟を漕ぎ漁撈に從事してゐる為 5 指は著しく發達してゐる。





第23圖 主家床構造 圖



24 圖 倉 庫



第 25 圖 倉庫の脚部 (鼠返し)



第26圖 倉庫內部

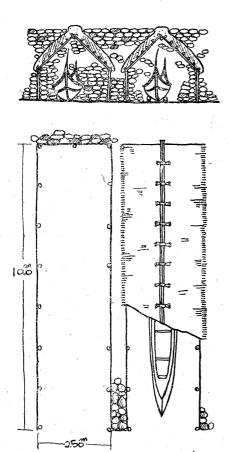
第3章 附屬建造物

1. 倉 庫 (第24圖——第26圖)

ヤミ族に於ては倉庫を別棟として建築したものは少なくその 規模も極めて小さく4本の柱を立て床は地上約1米位の高さに 板を張り壁は竹或は小さな樹枝を以て軸組を作り茅を以て圍ひ 屋根も亦壁と同じく簡單な切妻構造の茅葺である。



第 27 圖 舟 艙

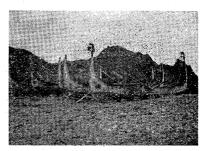


第 28 圖 舟艙實測圖(イモウルツル社)

2. 舟及び舟艙 (第27圖----第29圖)

ヤミ族の男子は漁撈を主業とするを以て、舟の構造は他の文化・科學的方面に比べて驚異的進步を示してゐる。即も他の未開の種族の所用する様な刳舟ではなく龍骨を以て堅固に刺組を建造しこれに敷枚の側板を張り兩端は高く反り上り、外部には幾何學的模様を彫刻しこれに代赭、白堊及び黑色を以て彩色を施したものである。舟の大さに依つて次の如く數種に分けてゐる。

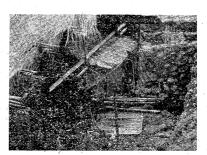
10	人	8 人,	6 人乘	Tinurukura
4	人	乘		Pinononoga
2	人	乘		Pikabagan
1	Ā	乘		Pikatagian



第 29 圖 舟 (チョルクラン)



第 30 圖 豚 小 舍



第 31 圖 鷄 小 含

舟艙も亦舟の大さに依つて大小の相違はあるが、何れも地盤を長方形に掘り下げて入口は海に面し内部に石を積んで壁を作り、屋根は丸太又は太き丸竹を交叉してこれに棟木を架し、茅葺である。

3. 豚小舍 (第30圖)

ヤミ族の豚小舎は敷戸共同のものが多く、住家の附近に石垣 を縛らし小舎は樹枝を以て閩ひ屋根は茅葺である。

4. 鷄小舍 (第31圖)

鷄小舎は住家の附近に獨立して作るものと主家等の軒下に吊 したものとがある。何れも樹枝或は空箱等を用ひて簡單に作ら れてゐる。

第4章 ヤミ族住家の實例

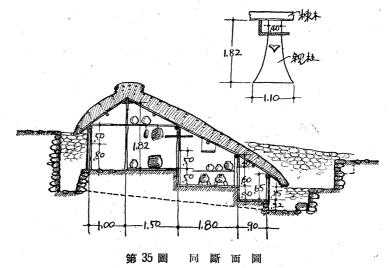
所在 紅頭嶼イモウルツル社

戸主 シヤマン・サルマンピツ

イモウルツル社は紅頭嶼の南岸八代灣に臨んだ傾斜地に在つ て地質は泥濕農耕地等少ない。八代灣は水深比較的深く暗礁も なく定期船の碇泊港であり又島内唯一の紅頭嶼警察官吏駐在所 の所在地で教育所・交易所・療養所等も併置され 行政上島の中心をなしてゐるが文化的には他社と 何等異なりなく進步の跡も見られない。 戸主シャ マン・サルマンピツは當社の頭目であるが官命だ 依るもので特種の支配權等は有しない。 元來ヤミ 族には頭目制度はなく平等の生活をしてゐるので

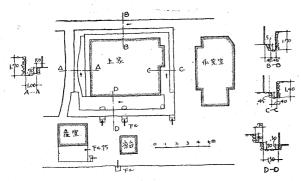
住家に於ても他と比較して特色はなく主家、作業 室、凉臺、産室何れも南向で海に面して建てられ

てゐる。(第32圖——第54圖)

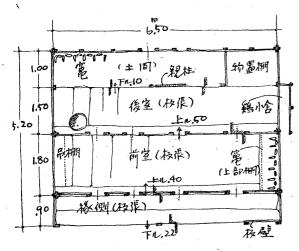




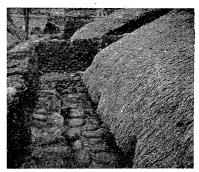
第32圖 住家全景



第33圖 同配置圖



第34圖 主家平面圖



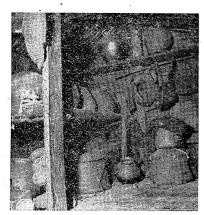
第 36 圖 同 前 面



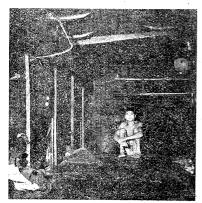
第37圖 主家內部(椽側)



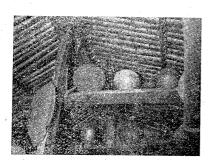
第 38 圖 同 (前室)



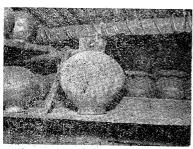
第 39 圖 主家内部(後室の物置棚)



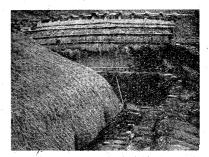
第 40 圖 同 (後室の鑑附近)



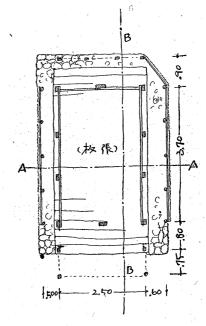
第 41 圖 同 (後室の棟附近)



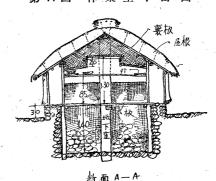
第 42 圖 同 (間仕切壁の上部)



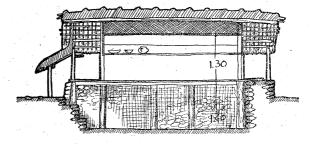
第 43 圖 主家前面及作業室側面



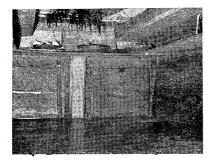
第44圖作業室平面圖



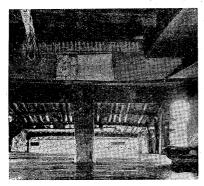
第45圖 同横斷面圖



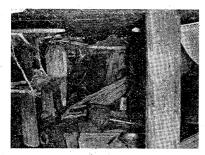
第45圖 同縱斷面圖



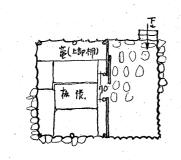
第 47 圖 同内部 (入口より奥を見たもの)

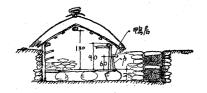


第 48 圖 同 (奥より入口附近を見たもの)

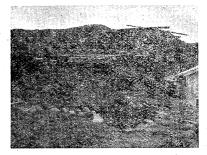


第 49 圖 同 (地 下 室)





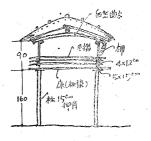
第 50 圖 産室平面圖及び斷面圖

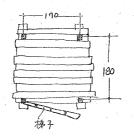


第51圖 産室及び凉臺

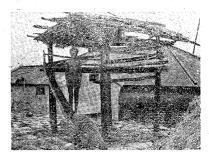


第52圖產室前両





第 52 圖 凉臺平面圖及び斷面圖



第 54 圖 凉 臺